

第1章

序論

A. 背景

このグローバル化の中、商売、産業、技術、観光、これらの産業は急速な発展をしつつある。日本文化も同様である。そのため、これらの産業のコミュニケーションの掛け橋となる日本語は、世界中に発展しつつあり、特にインドネシアでは。これらの産業の間に立って、コミュニケーションの架け橋としての役割を果たすため、日本語と関わっている専門家に、高い競争力とプロ意識を求められている状態にある。

そのため、高い競争力やプロ意識が求められる機関には、教育サービス部門における仕事の競争力の基準を作る必要があると感じる。インドネシア共和国移住と労働大臣（Menteri Tenaga Kerja Dan Transmigrasi Republik Indonesia）はホテルの日本語副分野言語教育サービス分野私立教育サービス副部門教育サービス部門 SKKNI（エスカカエヌイ）に関する大臣の決定：Kep. 30 / Men/ III / 2010 を決定をした。

インドネシア国家仕事競争力基準 { Standar Kompetensi Kerja Nasional Indonesia (SKKNI) } とは特定の地位につくために最低限の

必要な技能、知識、仕事に対する姿勢の範囲にまで渡る、能力の説明である。そのため、仕事競争力基準を作るには職場における、競争力の分析結果を通じて作らないといけない。（Kepmen、2009）（2009年、大臣決定）。

日本語の分野にインドネシア国家仕事競争力基準 { **Standar Kompetensi Kerja Nasional Indonesia (SKKNI)** } を作り、実施されることによって、学校外教育機関も日本語の分野に専門家を育成するために、この基準を標準とする。

言語は人情や欲を伝えるための手段である。Samsuri (1985)も同様な意味で言語の定義を次のように述べる「言語は影響を与えることと影響を受ける手段や、動作、欲、人情、思考を作る手段、と定義し、そのほかの定義は言語は人間社会に一番根強いものである。言語を通じて人の習慣、教育背景、国籍、どのような家庭に育たれ、いい性格かよくない性格のことまで判断している」。

言語の学習は教師、カリキュラム、施設や設備、学習。（絵）、評価など、これらの必要があるから、複雑なことである。言語の学習の目的は話し手が自分の言った言葉に対する積極的な姿勢、スキル、理解をするためである（Enre、1994）

言語は他人に思考、アイディア、感情を伝えるための手段であります。伝え方が効果的であるかないかには話し手の能力による。言語

力を持てばコミュニケーションは効果的になる。双方向的な日本語の学習におけるコミュニケーションツールは、口頭と文書である。コミュニケーション能力は言語自体だけではなく、言いかえるとだれに対してか、状況によってどのように正確に伝えるかのことも考慮しなければいけない。そのほかの言語の学習の目的は、言語を知るためではなく、言語に対する使い方を向上させるためである。

SKKNI (エスカカエヌイ) における日本語科目の範囲は、聞く、話す、読む、書く、と言った四つの言語力の範囲に渡る。これらの四つの要因は、言語の使用者が口頭や文書を通じて、コミュニケーション文脈に沿って、思考、アイディア、意見を伝える時に支えとなる要因になる。

外国語として日本語はそれぞれ、3年制短期大学制度 (Diploma III) の歓待専攻部屋部門経営学科 3、5、6、学期に、3年制短期大学制度 (Diploma III) の旅行専攻旅行運営管理と観光旅行サービス業務経営学科 1、2、3、学期に、4年制短期大学制度 (Diploma IV) 歓待専攻ホテル管理学科 1、2、3、学期に講義がある。

マカッサル観光アカデミ { 旧 観光教育訓練所 (Balai Pendidikan dan Latihan Pariwisata) } は 1991 年に創設され、同時に日本語は選択科目として設置された。当時は電気通信と郵便省 (Departemen Pos dan Telekomunikasi) の下に運営された。1998 年に文化、芸術、

観光省の下に運営され BPLP（ベペエルペ）はウジュンパンダン観光アカデミー（Akademi Pariwisata Ujung Pandang）に名前を変更した。2001 年に観光と文化省の下に運営されマカッサル観光アカデミー（Akademi Pariwisata Makassar）になまえを変更した。実施してある学科は下記である。

表 1.1 マカッサル観光アカデミーの学科

学科	専攻	制度
旅行業務経営	旅行	D IV
ホテル管理	歓待	D IV
観光経営	観光	D IV
観光旅行サービス業務経営	旅行	D III
旅行運営管理	旅行	D III
部屋部門経営	歓待	D III
調理経営	歓待	D III
部屋部門経営学科	歓待	D III
調理	歓待	D I

資料： マカッサルアクパルアカデミー 管理：2010

近代日本語に興味を持つ人は増えつつあり、学校、大学、塾の数が
増えることは証拠と言える。マカッサルには二つの日本語の塾があり、
一つ目はカオリ ブンカエン (Kaori Bunkaen) 二つ目は JCC (ジャ
パン カンバーセッション コース) である。九つの高等学校や六つの
高等専門学校は、国立も私立も日本語を教えている。学校の例として
は第一国立高等学校、第五国立高等学校、第十七国立孤島学校、第
二十一国立高等学校、イスラム国立高等学校 (マン モデル)、カル
チカ チャンドラ キラナ高等学校、カトリックラジャワリ高等学校、
ムハम्मadiyah 高等学校、ダルッサラム高等学校、第四国立高等
専門学校、第六国立高等専門学校、チュリチュンガル 45 高等専門学
校、カルチカ高等専門学校)、ヤプミ高等専門学校、ハンダヤニ高等
専門学校。

以上にいくつかの学校での日本語の学習の難しさがあり、マカッサ
ル観光アカデミー学生が「行きます」、[来ます]、[帰ります]という
移動動詞 を学習する際、困難であると研究者は観察し把握した。ほ
かの動詞を教える前に、研究者は「行きます、来ます、帰ります」
といった移動動詞 を教えて、日本語における全ての動詞を教える前に
することにした。「行きます」、「来ます」、「帰ります」という移
動動詞 にいつも同行する助詞があるため、ほかの動詞を教えるのに必
要時間は、比較的結構時間がかかる。マカッサル観光アカデミー学生

は「行きます」「来ます」「帰ります」といった移動動詞に最適な助詞を選びにくいようである。秋元 (2006: 3) も同じような意味で次のとおり述べる「外国人が日本語を学ぶ場合むずかしい要素がいくつもあるが、助詞もその一つだということがよく言われる。しかし、助詞を学ぶ場合一つ一つ暗記するのではなく、その用法を考えながら学習していくと、そんなにむずかしいものではない」。

日本語の初心者である学習者は概ね、「行きます」「来ます」「帰ります」といった移動動詞に同行する「に」の助詞（時間を表す）、「と」の助詞（動作、関係の及ぶ相手を表す）、「で」の助詞（何かを使用して行うのを表す）、「へ」や「に」の助詞（目的を表す）という助詞を理解しにくいのは事実である。助詞とは単語と単語の関係をはっきりさせ、単語の後に付いて、付属語類のことである」。(Dahidi dan Sujianto、2004:181)

付属語の定義は単独では用いられず単語である。助詞一文字でも様々な機能を持つ。移動動詞の説明は幅広く用いるため、研究者は「行きます」「来ます」「帰ります」といった移動動詞「と、に、と、で、へやに」といった助詞だけを研究を行う。

「行きます」「来ます」「帰ります」と言う移動動詞を教える時の最初段階は、「アディさんはジャカルタへ行きます」という文法を教え、次の段階は「どこへ（どこに）」「いつ」「何時に」「誰

と」「何で」「どこへ」に発展させる。「に」の助詞は出来事の時間を表す役割を持ち、「と」の助詞は一緒に動作をやる人を表すこと、「で」の助詞は移動動詞と関係のある動作をするときに使う手段や道具を表す。最後に、「へ」あるいは「に」の助詞は目的を表す。

以上で述べられた助詞の例を使って、学生に文を作らせると、助詞を付けるのに困難であるようである。次は時間を表す助詞に学生がよく誤りがちの例を挙げる。学生はよく「に」の助詞（出来事の時間を表す）を付け「昨日に映画館へ行きました」の様な文を作る。正しいなのは「昨日映画館へ行きました」。「に」の助詞は出来事の時間を表すのに付けるものであるが、全てに適用させるわけではない。「で」の助詞にもそのように扱われることが多いようである。学生は「歩いて帰ります」の文を作成の時、「で」の助詞を付け、「歩いてで帰ります」という文になってしまう。学生が助詞の付け方によく間違いをするため、筆者は「行きます」「来ます」「帰ります」といった移動動詞に付ける助詞と、「行きます」「来ます」「帰りますと」といった移動動詞とを解かりやすいかつ効果的なマルチメディアを利用し教える。

教師は特に初心者の学生らに外国を教える際、十分のスキルを求められる。教師は学生は日本語の学習に、より理解しやすいため

に、 様々な方法やイノベーションも求められる。 学習過程において教師は大事な役割を持っており、 学生が正しい文法に従い簡単な会話を出来るか出来ないかには、 教師の能力により決まる。 能力、 プロ意識、 教育背景、 これらは学生の成功に繋がり、 教師は持つべき要素である。 教師の能力は学習成功に繋がる第一の要因である。 学生に、 よりよく教えるためには、 創造的かつ革新的な姿勢や新たなやり方で学習過程に適用することが求められる。 学習戦略は学習方法を通じてしか実行するしか仕様がないため、 学習戦略を実行出来るかどうかは教師が学習方法を実現させる能力によるものである。 戦略は特定の理屈にアプローチする意味も含む。 方法は概ねある目的に達成させるための学習手順。 手法は学習過程が行われる時に実際の手段である。 (Suyatno: 2004)

教師は同じ方法でも手法を変えることが出来ます。 そのため、 戦略のなかにあるアプローチ、 方法、 手法を上手に利用し、 様々な戦略を駆使する必要がある。 日本語を勉強するのに、 より理解しやすいためには革新的な学習のやり方を作る必要がある。 しかも学生は退屈を感じないよう、 モチベーションを向上させるためにはまた一つのイノベーションの目的である。

日本語の中に「行きます」「来ます」「帰ります」という移動動詞に付く助詞は色々あるので、 学習により簡単に勉強できるため、

興味あるいはモチベーションを向上させるため、“マカッサル観光アカデミーにおける学生の移動動詞の学習に対するマルチメディアの効果”をテーマに研究を行う。

マルチメディアを利用する目的は日本語の学習者において、特に「行きます」「来ます」「帰ります」といった移動動詞の学習に、より簡単に勉強が出来るためや、興味あるいはモチベーションを向上させるためである。

先述の理由を元に、筆者はマカッサル観光アカデミーにおける学生の移動動詞の学習に対するマルチメディアの効果について研究を行う。このような研究はマカッサル観光アカデミー、ほかの学校や研究対象にもなったことがないと解かってから研究を行う。学習における問題解決ためや、学習の勉強心を向上させるため、移動動詞の学習におけるマルチメディアの効果について経験的なデータが必要があるため、研究を行う。

この研究結果は学生に役立つこと、創造的、革新的、楽しい学習戦略を作るためのほか、特に移動動詞の学習に関する解決を得るための手がかりとなる。そのため、移動動詞に関する適切な学習戦略は求めらる。

B. 問題の設定

先述の背景を元に、 次のように研究問題を明確にする。

- a. マルチメディアを使用する学習過程前及び学習過程後のマカッサル観光アカデミーの移動動詞を理解する能力はどのようにあるか？
- b. マルチメディアを使用する学習過程前及び学習過程後のマカッサル観光アカデミーの移動動詞を理解する能力の相違はどのようにあるか？
- c. マカッサル観光アカデミーの学習者にとって、移動動詞を学習することにおけるマルチメディアの効果性はどのようにあるか？

C. 研究目的

- a. マルチメディアを使用する学習過程前及び学習過程後のマカッサル観光アカデミーの移動動詞を理解する能力。
- b. マルチメディアを使用する学習過程前及び学習過程後のマカッサル観光アカデミーの移動動詞を理解する能力の相違。

- c. マカッサル観光アカデミーの学習者にとって、移動動詞を学習することにおけるマルチメディアの効果性。

D. 研究の意義

この研究結果はマカッサル観光アカデミーでの初級日本語教育における学習についてを説明できると期待されます。そのため、この研究結果は理論的と応用的な役割を果たすと期待される。

理論的の役割は、この研究結果が「行きます」「来ます」「帰ります」という移動動詞の教育理論に経験的な貢献を出来、使われた理屈の検証証拠になることや、マカッサル観光アカデミーでの日本語学習における「行きます」、「来ます」、「帰ります」という移動動詞の教育に貢献できる。

この研究結果が教師、大学生、次の研究のために役割を果たせると期待される。大学生のためには、この研究が正しい日本語の手がかりや参考になれる資料になる。重要な目的は、研修（Job Training）をして日本人と実際にコミュニケーションをするときに間違いなどがないようにするためである。教師のためにこの研究は、学習過程における「行きます、来ます、帰ります」という移動動詞を使うときの要因をもっと理解できると期待される。次に研究を行う方々にとっては、この研究が参照になると期待される。

E 仮説

問題意識、材料、枠組みにおける説明を考慮し、マカッサル観光アカデミー(H1)の学習過程に、マルチメディアの適用は効率であると仮説を立てる。

仮説検定は次のとおり： t 数 $>$ t 表であれば対立仮説（H1）は立てる。逆に、 t 数 $<$ t 表であれば対立仮説（H1）は受けられない。すなわち、有意確率 5% で t 数は t 表より大きいあるいは同じであれば仮説は受けられる。

F 研究方法

この研究は研究者が、比較相手（制御被験者=class activity）なしに、一団の被験者を実験させる。そのような実験方法は一団 予備テスト—事後テスト と言う。この一団の被験者から、よりの確な結果を得るため、実験前は予備テストと、実験後は事後テストを適用させる。研究の主体はマカッサル観光サアカデミー観光サービス業務経営学科に在学している 2 学期の一つのクラスの大学生である。

G 研究の対象

この研究の対象はマカッサル観光アカデミーで 2010 / 2011 年 の日本語学習者全てである。

研究の特性、研究者の力、時間、資金は限られたため、この研究での標本抽出法は有意無作為抽出法を使う。観光サービス業務経営を専攻に2学期の大学生は標本として決められて、人数は22人である。データ分析を考慮のため、観光サービス業務経営を専攻に2学期の大学生は標本として決められて、22人と決めた、学生の学力は同質である。

H 研究手段

a 試験

b 観察指道

c アンケート

